

【令和7年度 全特連 研修・研究活動支援事業報告書】

地域に点在する「ことばの教室」担当者向けの勉強会

～オンラインによる構音検査実習と非同期型の公開授業～

1 はじめに

2018年度より、新潟県では「ことばの教室」の担当を新規に希望する教員に対し、OJT方式による育成事業を行っている。新型コロナウイルス感染症拡大時、筆者はOJT担当になった中越言語・難聴教育研究協議会（以下、中越言難）会員からの相談を契機に、研修生向けの構音指導に関するオンライン勉強会を初めて開催した。地域に点在し、担当者も少ない「ことばの教室」において、オンライン勉強会の実施に大きな可能性を感じた。2021年度からは新潟県立教育センター主催の言語通級新任担当者向け研修会を担当しているが、その中で専門的技術を要する構音検査や、実習が必須となる構音指導に自信がない担当者に度々出会うことがあった。

そんな中、2024年度に再び中越言難会員から相談があり、有志会員と共に研修生に対して、特に技術が必要な構音検査に焦点を当てたオンライン勉強会を実施した。児童の誤り音を聴きとって整理し指導計画を作成する実習の中で、勉強会参加者の誤り音に対する弁別力が向上し、一定の成果を得ることができた。

そこで今年度は、全日本特別支援教育研究連盟の助成を受け、より充実したオンライン勉強会を開催することにした。勉強会では、基礎編として構音検査の実習だけでなく事例に対する指導法を外部専門家（言語聴覚士：以下「ST」）から学ぶ場を設定した。また応用編として、初めてオンライン上での非同期型の公開授業（以下「仮想公開授業」）を実施し、担当者の実践的な指導力向上を目指した。

2 活動1：構音検査のオンライン実習（隔週で実施）

(1) 対象

・OJT研修生を含む「ことばの教室」担当者：13名

(2) 日程

- ・第1期：8回 機能性構音障害：さ行等置換の事例
- ・第2期：8回 器質性構音障害：鼻咽腔閉鎖機能に課題を抱える事例

※1回あたり45分で実施した。

(3) 構音指導についてオンライン講義

・側音化構音に対する構音指導 講師：目黒文先生（学習療育支援 ポラーノ）

2025年度の第1期で取り上げた「さ行等置換の事例」は、「ことばの教室」でよくみられる事例である。ほとんどの担当者に指導経験があったため、第1期のSTからの講義はより難易度の高い側音化構音への指導法を取り上げた。

・器質性構音障害に対する構音指導 講師：大湊麗先生（新潟大学医歯学総合病院 言語治療室）

(4) 実習の様子

実習は全てオンラインで実施した（図1参照）。最初に構音検査の音源を全員で聴き、順番に聴き取った音に対する評価を公表した。自信がない箇所は誰でも何度でも音源を聴き返すことができることとし、参加者の聴覚的な弁別力の向上や誤りパターンの音声学的な理解を目指した。こうしたスキルの習得は、正確な検査結果と適切な指導方針につながると考えた。また、学校行事等で勉強会を欠席しても、その回の内容がわかるようにオンライン上に記録を残した（図2参照）。参加者が誰でも加筆や修正をすることができるため、参考資料の紹介や課題の配布等にも活用した。



図1 オンライン実習の様子

検査結果を整理した後は、最初に指導する子音の誘導方法について話し合った。第1期ではOJT研修生が、第2期では全員が考え、代表者がそれぞれ発表し意見交換を行った。第1期の事例では、担当者の経験を踏まえた多様な意見が出され、書籍の手法だけでなく目の前の子どもをしっかりと見ることの大切さを全員で再確認できた。第2期の事例では、指導経験の無い担当者がほとんどだったため、指導方針で意見が分かれた。それもあり、3月末実施予定の大湊先生からの講義を楽しみにする声が挙がっている。

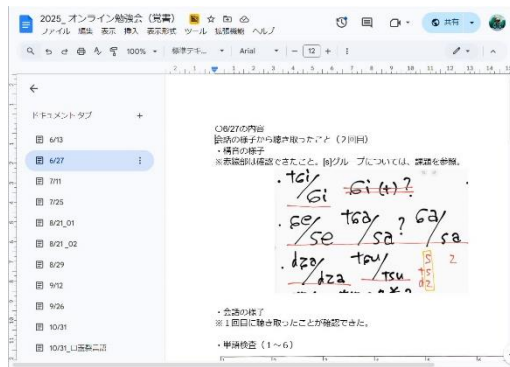


図2 オンライン実習の記録

3 活動2：仮想公開授業（年3回実施）

(1) 対象

・「ことばの教室」担当者：9名

(2) 日程

① 指導経過の報告（隔週で実施）

・17回

・対象事例：器質性構音障害1事例、機能性構音障害（置換1事例、側音化構音2事例）

※1回あたり45分で実施した。

② 仮想公開授業 3回実施

・1回目 機能性構音障害（側音化構音）

・2回目 機能性構音障害（さ行音等の置換）

・ 3回目 機能性構音障害（側音化構音）

(3) 指導経過の報告から仮想公開授業までの流れ

学級担任・教科担任は「指導案検討→公開授業（本時）→事後検討」という形で、教科指導スキルを向上させる場が定着している。これに対して「ことばの教室」では、担当者を集めた公開授業はほとんど開催されていない。今回は、動画にタグやコメントを付けて保存できるサービス（RECOROKU）を組み合わせることで、非同期ながら公開授業を実施した。

まず、担当者4人がペアを組み、隔週で指導経過を報告し合った。そこでは、保護者向けの宿題用の動画（図3参照）を提示しながら進捗状況や課題を紹介し、意見交換を行った。

進捗状況から支援が必要な事例に対して、STを指導者とする仮想公開授業を実施した。指導案検討と事後検討はオンラインで実施し、対象事例の時間割に合わせる必要がある公開授業のみ、RECOROKU上に保存した動画を視聴する形にした。RECOROKU上には、公開授業の動画だけでなく、指導経過の報告で提示してきた各事例の宿題用動画や、授業を行う担当者（以下、授業者）とSTの事前打ち合わせの様子も保存し、話し合いに参加する担当者が自由に視聴できるようにした。それぞれの動画やST、授業者、担当者がそれぞれ入力したコメントを手掛かりに、指導案検討や事後検討では、思った以上に活発な議論が展開された。

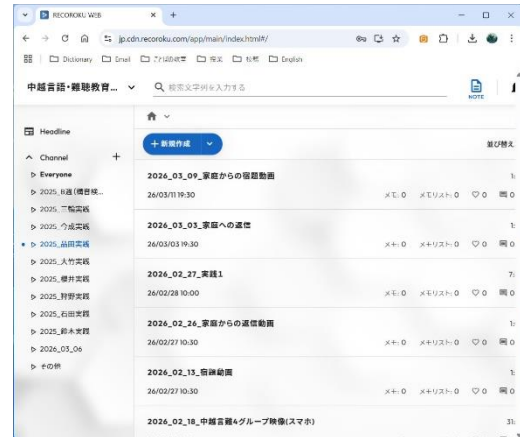


図3 RECOROKUに保存された動画

4 仮想公開授業の実際：2回目に実施した機能性構音障害（さ行音等の置換）の場合

(1) 指導案検討

授業者は、公開授業で行う構音指導の中心的な課題についてのみ指導案を作成する。指導時間は20分ほどであり、ここに指導者のSTもオンラインで同席する。中心的な課題のみの指導案としたのは、限られた時間で要点を絞った話し合いを行うためであり、同時に指導案を作成する授業者の負担軽減のためでもある。

本授業の中心的な課題は「子音[θ]に舌を出した母音[u:]をつなげて、単音節[θu:]を作ること」であった。授業者は、「児童が子音と母音の間に呼吸してしまい、単音節を作れないのではないか」という不安を抱えていた。他の担当者は、授業者とSTの事前打ち合わせの様子（図4参照）をRECOROKU上で視聴して指導案検討に臨んだ。動画視聴により、授業者の意図や問題意識等を理解できていたため、論点を明確にして話し合うことができた。話し合いの結果、出来ていることから少しずつ難易度を上げ、中心的な課題に迫ることになった。

・どの時刻にどんな内容を話しているかわかるようにタグやコメントを入れた。

・STからは、授業者に考えてほしいことについて、コメントが述べられた。

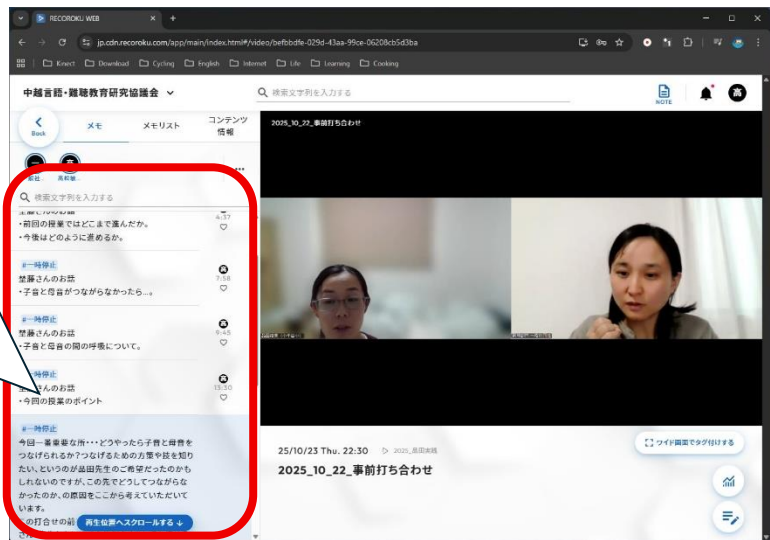


図4 公開授業に向けたSTとの打ち合わせの様子

(2) 公開授業（本時）

公開授業の指導案より、中心的な課題に取り組んでいる部分のみ（表1参照）抜粋して記載する。指導案検討を経て、追加された部分に黄色のマーカーをつけた。

表1 子音[θ]に舌を出した母音[u:]をつなげて単音節[θu:]を作る

学習活動	教師の働き掛け	○目標 ※留意点 ◇評価の基準
構音訓練① ・子音[θ] ・後続母音[u]	T2:べろを出して風さんを練習しましょう。 T3:べろを出して「う」を練習しましょう。	○[θ]を連続10回出す。 ◇楽に[θ]ができているか。 ○舌出し[u]を連続10回出す。 ◇楽に舌出し[u]ができているか。
構音訓練② [θ]+[u:]	T4:風さんと「うー」を順番に言いましょう。(図5参照)	○[θ]+後続母音[u:]をつくる。 ※口形が変わらないこと、舌を引っ込めないことを画面上で確認させながら進める。 ※難しそうにしていたら、子音と母音を順番に練習するところに戻る。 ◇[θ]+後続母音[u:]を10回連続でできるか。

・公開授業の動画には事後検討に向けて、授業者のモデルや児童の構音についてのコメントが、STから述べられた。

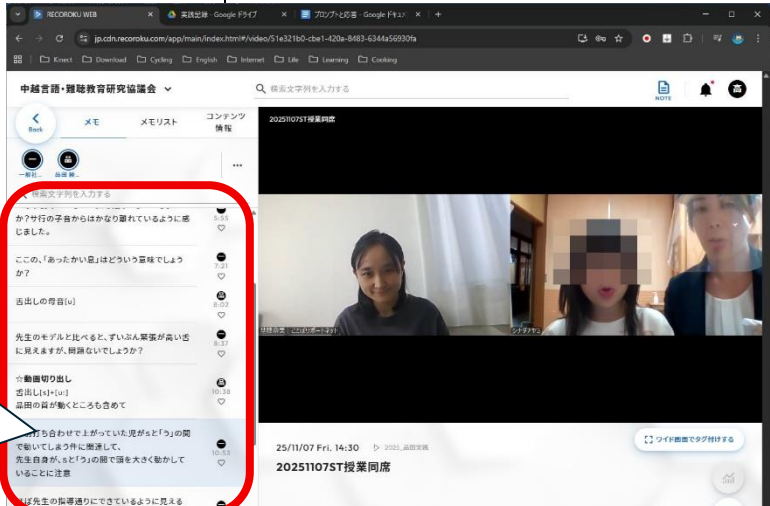


図5 [θ]+後続母音[u:]の様子

(3) 事後検討

授業者からは、「児童の構音をどのように評価していいか迷いが生じてしまい、それが不明確な指示を出す原因になってしまったこと」、「授業者のモデルが原因で、児童が子音と母音の間に呼吸してしまったこと」等が反省として述べられた。さらに、ST から構音時の口腔周辺の緊張を取り除くためには、直接的な摩擦音を狙うのではなく力を抜いた「風」(子音)に「声」(母音)をつなげる手法が授業者に紹介されており、既に取り組んでいて有効であることも報告された。

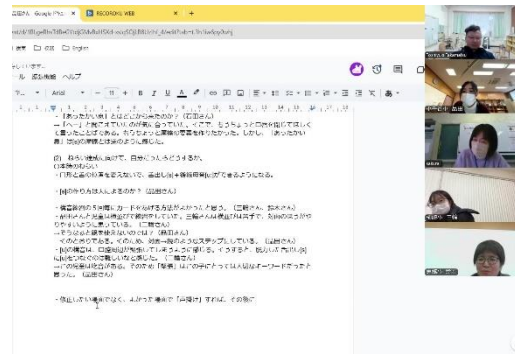


図6 オンライン上に記録しながら議論する様子

事後検討に参加した担当者たちは、次の話題について幅広く議論することができた。(図6参照)

- ・児童に対する肯定的な声掛けの頻度やタイミング
- ・児童の集中度に応じた授業者の位置（対面や横並びの配置）の使い分け
- ・保護者向けの宿題動画の作成方法

さらに、児童が頑張ろうと努力した結果、意図せずに発声器官に力が入ってしまい、誤り音が生じる例も共有された。このように、事例を通じた担当者同士の「学びの場の重要性」を再認識できた時間になった。

5 仮想公開授業についての成果と課題

今年度は、合計3回の仮想公開授業に取り組んだ。経過報告や仮想公開授業に参加した担当者の意見から、この取組の成果と課題を整理する。

(1) 成果

① 外部専門家 (ST) による多角的な分析と気づき

事後検討において、ST から「指導の構え」に関する具体的な助言が得られた。授業者自身の試行錯誤に対し、「複数の目」で客観的に評価されることは、指導の方向性を確信に変える貴重な機会となった。また、経験の浅い担当者にとっては、他者の詳細な授業風景を参観すること自体が、優れた学びの場になった。

② 非同期型の授業参観による利便性と継続性の確保

RECOROKU を用いた非同期型の授業参観は、公開授業を開催する上で移動時間の削減のみならず、各自の余裕があるタイミングでの授業参観（動画視聴）を可能にした。また、単発の授業公開とは異なり、RECOROKU 上の動画で指導経過を追えるため、対象事例の変容を時系列で捉えられるというデジタルならではの利点を確認された。

③ 事実に基づいた即時的な検討

事後検討中に、議論の焦点となった場面を即座に映像で振り返ることができるため、記憶や主観に頼らない、質の高い具体的な協議が実現した。

(2) 課題

① 業務負担と時間捻出の限界

通常業務と動画視聴・検討時間の両立は依然として大きな障壁である。「研修時間の固定」は一定の効果を奏したが、参加した担当者側の多忙感は依然として残り、さらなる効率化が求められる。

② 検討プロセスの最適化と動画録画時のマニュアル化

授業者の負担を軽減するため、指導案検討を対象事例の状況に応じた「簡略化された説明会」に留めるなどの柔軟な運用が必要である。また、撮影時の画角（アップとルーズの使い分け）等の録画方法のマニュアル化等は、授業者の負担軽減につながるだけでなく、参加者にとっても視点が統一されるので必要な工夫だと思われる。

③ 専門領域に応じたグループ編成

中越言難の研修会のように、大人数で今回のような仮想公開授業を行う場合には注意が必要になる。言語指導と難聴指導では専門性が異なるため、事後検討のような話し合いは、各領域に特化した少人数グループによる検討の方が、より専門性の高い深い議論が期待できる。

6 取組を終えて

これまで筆者が行っていた構音検査実習を中心としたオンライン勉強会を発展させる形で、初めて実際の指導場面を見ながら検討する場を作るために、非同期型の公開授業に取り組んだ。動画視聴という形ではあるが、「ことばの教室」担当者の指導やそれに対する対象児童の反応を見て、協議を行うことができた。このような取組は、担当者の構音指導スキルを向上させる場として大いなる可能性を感じている。今後は、子音の誘導等の担当者が困難に感じる場面を本時に設定する等して、指導スキルの向上に寄与する公開授業の在り方を探っていきたい。